



# やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

## 一人でできるようになるということ

学校保健委員会を開催した。学校医、学校歯科医、学校薬剤師といった専門の立場の方々から、子どもたちの健康について助言を頂ける場を後半に設定した。参会して下さった保護者からこんな質問が出された。「歯磨きをいやがります。自発的にできるように何かよい方法はありますか。」

これに対して、歯科医師のT先生は、非常に難しいことであり、そう簡単に解決する問題ではないと前置きし、次のように説かれた。「歯磨き」を「勉強」に置き換えてみてほしい、「勉強をいやがります。自発的にできるように何かよい方法はありますか。」と。

確かに、勉強をいやがらず、自分から進んでできるようになるという、そんなよい方法があれば、教師である私にぜひとも教えてもらいたい。勉強も、歯磨きも、ひよっとすると脱いだ服をたたんだり、くつを揃えてぬいだりすることなど、ちょっとした日常生活の習慣は、あたりまえのことになるまでに相応の過程が必要で、なんとも難しいことなのかもしれない。

会場で話を聴いていた一同は、苦笑すると共になるほどと納得もした。さらにT先生は、「非常に難しいことだけど、おうちの人といっしょにすることで身についていくものです。」とさらりと説かれた。

確かに、私も小さい頃、歯磨きについて言えば、いやがるということはなかったものの、たいてい忘れてしまっていた。自分からすすんで歯を磨くというのは、学校の検診結果を受け、歯医者さんに診てもらふことになる、その前後に、気合いを入れて磨いたくらのことである。家族の誰か、たいてい母親に歯を磨くように言われ、さあ歯磨きの時間だと、父親の追い立てる声に重いおしりをあげ、みんなで一緒に歯磨きをしたのである。歯磨きをみんなでやったあとには、いつも「気持ちいいなあ、すっきりするなあ」と、誰かが言っていたように覚えている。それがやがて、兄と弟の子どもばかり3人で歯を磨くとなると、誰が一番なのかが問題になり、早く終わるのが一番か、時間をかけてちゃんとするのが一番なのかで言い合って、最後はケンカにもなった。こうして誰かと一緒になくても、また誰かから声をかけられなくても、一人で自分から歯磨きがきちんとできるようになったのは、他者の目を意識するようになった小学校の高学年くらいのことではなかっただろうか。

もうすぐ夏休みだ。勉強も、歯磨きも、子どもの日々の生活にちゃんと根付いているかどうかを試されることになる。その結果如何で、大人にとっては暑さ以上にイライラとすることが多くなる期間となるだろう。子どもと一緒にすること、そばにいて見守ってやること、そして、そばにいてもちゃんと心に留めておいてやること…、子どもへのかかわり方が改めて学べる絶好の機会と捉え直し、実践したい。

校長 大林 道範